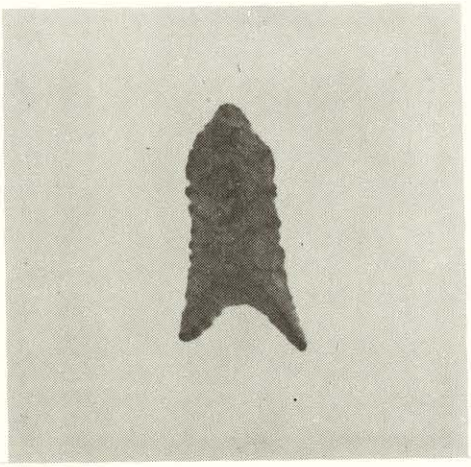
交野市文化財調査概要1973－1

神宮寺遺跡範囲確認調査概要

―交野市倉治所在―



1973.3

交野市教育委員会

はじめに

神宮寺遺跡は、近畿における唯一の縄文時代早期の遺跡として貴重な存在である。

先年、この地から発見された土器は「交野神宮寺式土器」として位置づけられ、その文様の施文法に特色をもち、いくつかの問題点をなげかけた。

交野市域には、縄文中期の星田旭遺跡や、弥生時代の高地性南山遺跡をはじめ、数かずの古墳群があり、これらの遺跡から、この地方のめぐまれた水と土によって人びとが生活し、原始文化を栄えさせたことがうかがわれる。神宮寺遺跡は、これら原始文化のあけぼのともいえるであろう。

こうしたこの地の重要性に鑑み、今回、文化庁の指定事業として、遺跡範囲確認調査を実施した。幸い、調査にあたっては多くの方がたの御援助のもとに所期の目的を達することができた。ここにその資料をまとめ、概要を報告し、今後の保存活用の資にしたい。

昭和49年3月

交野市教育委員会
教育長　北田　甫

例　　言

1. 本書は、交野市教育委員会が国庫補助事業（総額 1,000,000円、補助率50％）として計画し、交野市教育委員会が担当実施した交野市倉治所在の神宮寺遺跡範囲確認発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、交野市教育委員会の奥野義雄を担当者とし、昭和48年10月17日着手し、3月31日事業を完了した。この間、大阪府教育委員会から種々援助かつ指導をうけるとともに、調査実施にあたっては、西尾宏社会教育課長と調査員として奥野平次が終始従事した。また、土地所有者の金沢丘八、田中義政、厚主多嘉子の方々から好意的な協力をいたゞき、田中ひさえ氏からも好意ある接待を賜わった。

   さらに、地元の熱心な郷土史研究者の方々、そして桜井敬夫、北尾清治、中野作一郎の諸氏の援助を得た。ここに記して感謝の意を表する。
3. 本書作成かつ調査実施にあたって片山長三、渡辺誠、四手井晴子の調査顧問の諸先生から専門的な御助言かつ指導を賜わった。ここに記して厚く感謝の意を表する。
4. また、本書作成にかかる遺物整理等々について、かつ調査実施にあたっては、奥野和夫、河辻和文、中可清、松田隆之の学生諸君の援助をえた。さらに、玉井功氏より遺物整理に助力をいたゞいた。ここに感謝の意を表する。
5. 本書作成にあたり、写真撮影は平田政信氏の協力があった。また、文責は調査担当の奥野義雄が負うものである。
6. 調査実施に際して、スライドを作成したので、広く市民の方々に利用していたゞきたい。

神宮寺遺跡範囲確認調査概要

第1章　経　　過

都市への人口集中化にともない、大阪近郊の各市町村のベット・タウン化は、丘陵や田畑を無秩序に削り、埋め、宅地化へと勢いよく変質されている。この交野市域は、大阪近郊にあるとはいえ、その渦中からはかろうじて免がれているようにみえる。しかし、近い将来、交野市域でも宅地開発の波は、より一層勢いよくおしよせるであろう。このような交野市域の交化財保護と宅地開発の状況下で、神宮寺遺跡の範囲確認発掘調査が行なわれることになった。

地　区　設　定

昭和48年10月17日に現地を訪れ、調査を開始した。まず、発掘作業にさきがけて、地区およびトレンチの設定を行なった。すでに近年、調査以前数ヶ月前に神宮寺遺跡内の府道（枚方大和郡山線）から東に入る農道の舗修工事で縄文土器・石片が発見された。この地点をA地区として、その東方の上段の広範囲のみかん畑をB地区とした。また、B地区の対北部、すなわち交野山頂へ通じる山道を挟んである北側のみかん畑をC地区として、地区設定を行なった。さらに、その後、各地区にそれぞれ2～4つのトレンチを設置し、それらのトレンチに第1から第11のトレンチ番号をつけた、第1トレンチから第11トレンチを設定後、まず各地区の地形実測を行ない、かつトレンチ設定地点を測量した。

各トレンチ設定

第1トレンチ

第2トレンチ

その後に至って、南北長さ15m×巾2mの第1トレンチの表土の削平作業を行なった。順次、長さ東西長さ7m×巾2mの第2トレンチ、東西長さ10m×巾2mの第

第３トレンチ　３トレンチの表土層の削平を行なっていった。

各トレンチとも表土下、第２層の茶褐色砂質土の床面の状況を窺った後、第１トレンチの第２層の削平を始めた。第１トレンチの第２層は35cm前後の堆積をみせ、第２トレンチの第２層は40cm内外、第３トレンチの第２層は25cm前後の堆積を示していた。各トレンチの第３層にいたって、第１トレンチにおいては荒い砂質土、第２トレンチでは暗茶褐色粘質土、第３トレンチでは暗い黒色の粘質土（黒色有機質土）が堆積していることがわかった。また、第１トレンチの北側では荒い砂質土（第３層）下に、第３トレンチの黒色有機質土（第３層）が堆積し、この第１トレンチと第３トレンチの接する地点の第３層中より若干の縄文土器片と石鏃（１点）を検出することができた。

この各トレンチの第３層の状況を把握しながら、遺跡内のみかん畑の現況を鑑みて、トレンチ内の全域を掘り下げて第３層下の遺構の存否を確認することをやむなく断念し、現耕作物に障害のない部分、すなわち、第１トレンチでは南北軸の東側の半域、第２トレンチでは東西軸の北側の半域、第３トレンチにおいては東西軸の半域での第３層の掘り下げ作業を行なった。

その結果、第２トレンチおよび第１トレンチの第３層の堆積は、それぞれ45～55cm前後の厚堆積をみせていた。また、第３トレンチでの第３層の黒色有機質土は40cm内外の堆積を示し、トレンチの西方に進むにつれて、その堆積状況はやゝ薄くなっていることを知った。さらに、この第３トレンチの第３層下には砂質土があって、遺構を検出することはできなかった。

このＡ地区の第１トレンチから第３トレンチまでの調査を完了して以後に、Ｂ地区内に設けた第４トレンチか

第４トレンチ
第５トレンチ

ら第10トレンチまでの内、第４トレンチと第５トレンチの表土の削平作業を行なう。

南北長さ16ｍ×巾２ｍの第４トレンチおよびこのトレンチに直行させた東西長さ12ｍ×巾２ｍの第５トレンチの表土は20～35cmの堆積を示していた。第４・第５トレンチの第２層上面の状況を窺い、第２層の茶褐色土の掘り下げ作業を行なった。第４トレンチの北側から 6.5ｍの地点から北方の第２層は砂礫土を呈し、あきらかにこの地点より南方と堆積土が異なっていた。

この第４・第５トレンチも、Ａ地区の各トレンチと例外なく、現状がみかん畑のため、現耕作物に障害を及ぼさないように、第４トレンチでは南北軸の東側の半域、第５トレンチでは東西軸の南側の半域のみの第２層の削平にとどめざるをえなかった。

第４・第５トレンチの第２層中から中近世の土器を多数検出したが、第２層下の第３層上面には遺構はなかった。たゞ、第４・第５トレンチとも第２層の堆積は厚く40cm～60cm前後を保っていた。しかし、第４トレンチの北側では、この第２層の淡茶褐色粘質土によって砂礫質土は切られていることがわかった。そして、こと第４トレンチの北側の表土下に堆積している砂礫質土も40～50cm内外の堆積を示し、北部へすゝんでいることを確認した。さらに、第５トレンチの第２層下にはこの砂礫層が堆積していることを確かめた。これに対して、第４トレンチの第２層下には黒色粘質土（黒色有機質土）があり、この黒色有機質土（第３層）より単独で縄文土器の破片が多数検出された。この状況をみて、第４トレンチの南北軸よりやゝ、南方にこれと直行する第４'トレンチをたゞちに設けて、第３層上面まで掘り下げていった。この東西長さ10ｍ×巾２ｍの第４'トレンチも、さきのトレン

第４'トレンチの設定

チ同様、東西軸の南側半域を第3層まで削平可能であった。第4′トレンチでも、第3層の黒色有機質土の床面および土中より、単独で縄文土器の破片を若干検出できた。第4・第4′トレンチの上面の状況を窺い、第4層まで削平を行なった。この削平作業にともなって、第4・第4′トレンチとも、若干の縄文土器の破片を検出することができた。しかし、第4層上面に至ったが、遺構を検出することはなかった。たゞ、第4・第4′トレンチで検出することができた縄文土器を単独で包含する第3層の黒色有機質土が明らかになった。たゞ、第1トンレチと第3トレンチの接する地点で検出した石鏃の出土はなく、若干の石片が出土したことが、この包含層の特質である。

第4・第4′トレンチの第3層、すなわち黒有機質土の堆積は20～25cm程であるが、第4トレンチ内の西側面の一部に35cm程の堆積を示し、その両端が第2層の茶褐色土によって切られている状態をみると、元来は35cm前後の堆積をみせていたのかもしれないと思われるが明らかではない。この黒色有機質土は第4トレンチの北側4mの地点で消滅するが、南側へ延びていることがわかった（図版十）。また、第4′トレンチから、この層は、第4層の地形にそってやゝ西方へ低くなるにつれて西へ下がっていく状態を呈していた。しかし、第4′トレンチの西側より5mの地点は、A地区に落下してつらなる地形であった。

第4・第4′・第5トレンチの調査後、同地区内に設定した第6トレンチおよび第7トレンチとこのトレンチに直行した第8トレンチの調査に移った。

第6トレンチ

第7トレンチ

第8トレンチ

まず、東西長さ15m×巾2mの第6トレンチから表土の削平を行なっていった。表土は20cm前後の堆積を示し、表土下は茶褐色土であった。この茶褐色土の第2層上面

の状態を窺がった後、第2層を掘り下げていった。第2層は33cm前後の堆積をみせ、層下に茶褐色粘質土が堆積していた。この茶褐色粘質土は28～30cm内外の堆積を示し、その直下は砂質土であり、黒色有機質土の堆積はなかった。たゞ、第2層の茶褐色土中より第4・第4′・第5トレンチと同様に、中近世の土器片が若干検出できた。

また、西東長さ10m×巾2mの第7トレンチと南北長さ15m×巾2mの第8トレンチでは、20～25cmの表土層下の茶褐色土には混入土があり、この地域の耕作状況、すなわち攪乱状況がわかった。茶褐色土の上部にこの状況が著しく、下部は窺乱をまぬがれていた。この第2層の茶褐色土が40cm前後の堆積で、この層下には暗茶褐色粘質土が堆積していた。また、第2層中より礫石および中近世土器片が検出された。第3層の暗茶褐色粘質土にいたっては、現耕作物の障害にならないように第7トレンチでは東西軸の北側半域、第8トレンチでは南北軸の西側半域のみを掘り下げていった。この掘り下げによって、第7．第8トレンチとも第3層は38cm前後の堆積であり、部分的に第2層より窄がたれたピット（みかんの木の肥料穴）があるのみであった。

第9トレンチ
第10トレンチ

その後、同地区内の東方と東北に設けた第9トレンチと第10トレンチの調査に移っていった。第9トンンチは、南北の長さ15m×巾2mで、20cm前後の堆積を示す表土層下の掘り下げは、各トレンチ同様に耕作物の障害をさけるために、南北軸の西側の半域のみにとどめた。また、南北の長さ15m×巾2mの第10トレンチにおいても同じ調査工程をたどった。

まず、第9トレンチでは、表土層下、茶褐色砂質土が堆積し、この第2層の茶褐色砂質土も攪乱し、表土から穿がたれた直径75cm前後のピットがあり、このピットは

第3層の暗茶褐色粘質土までたっしていることがわかったが、このピットは後世のものであり、この時期に第2層の一部が攪乱したと考えられる。第2層の茶褐色砂質土は、46cm内外の堆積であり、第2層下の第3層上面には遺構は存在せず、さきのピットの痕跡があった。この第3層の暗茶褐色粘質土を掘り下げていったが、第3層直下には砂質土が堆積していた。

一方、第9トレンチと平行して掘り下げ作業を行なっていた第10トレンチにおいても、第9トレンチと同様の状態を呈していた。すなわち表土層下には茶褐色砂質土が堆積し、この第2層中に黄褐色粘土、褐色砂質土が混入し、攪乱していた。そして、トレンチの北側には第2層から第3層の暗茶褐色粘質土にたっするピットが1つあり、その堆積状況は、第9トレンチと近似していた。

第11トレンチ

第12トレンチ

その後、B地区の対北にあるC地区に設けた第11・第12トレンチの調査に移った。東西の長さ3m×巾1mの第11トレンチでは表土層下に黄褐色粘土層が堆積し、この層を穿った直径1mのピットがトレンチ内の西端で、また同内東端で巾30cmの深さ10cmの小溝を検出した。そして、南北の長さ5m×巾1mの第12トレンチでも表土下に固く叩きしめた状態の黄褐色粘土の床面を確認した。このC地区は、奈良時代創建と伝えられる開元寺跡にあたり、この第2層下の削平を中断した。

A・B・C地区内に設定した各トレンチの調査後、測量、写真撮影を行ない、遺跡の現場調査は昭和48年11月26日に終了した。

第2章　環　　境

地理的環境

大和川とともに大阪平野を肥沃な沖積地にした淀川は、大阪平野の北部で摂津と河内との両国を分かち、その東岸には、生駒山系より、数多くの尾根や丘陵が派生して、これらの尾根や丘陵の間には、生駒山系に源を発する大小の河川が分流し、尾根や丘陵の間を抜け出た地点で、淀川に合流しているのである。

古く、淀川の主流が河内寄りに流れていたことは、御殿山そして小倉・渚では崖下を通って、まっすぐに南に流れ埜野の崖下付近で、天の川と合流して、西方へ流れをかえていった。この天の川や穂谷川などの流れは生駒山系より派生した丘陵と丘陵の間の谷溪を洗いそして運び流された土砂によって、肥沃な沖積地を造り出している。この沖積地を、私たちは〈交野が原〉と称し、古くから文化が栄えた大地であった。そして、この肥沃な大地が形成されつつあった縄文時代には、この交野が原を

歴史的環境

見下ろす生駒山系の丘陵の一つである交野山の中腹にある神宮寺に縄文時代人が住みついたのであった。この交野市倉治・神宮寺の地に人々が住みつくまでは、枚方台地に、あるいは神宮寺遺跡がある上手の山腹に土器をもたなかった石器を主な道具としていた先土器（あるいは無土器）時代の人々の居住地があったと考えられている。この先土器時代の遺跡は交野市域では発見されていないが、縄文時代早期に神宮寺のこの地一帯（交野市倉治字神宮寺）に人々が住み、そこで生活していたことはあきらかである。

このように生駒山系の交野山丘陵を背景にし，また生駒山系から分流する河川によって形成された肥沃な大地には、数多くの遺跡が残されていた。今回の調査にかか

る縄文時代早期の神宮寺遺跡をはじめ、星田旭遺跡は神宮寺につぐ交野市域唯一の縄文時代中期の遺跡である。そして、淀川水系の一つとしてある天の川の豊富な水と肥沃な大地にめぐまれた天野が原一帯には、弥生時代の人々が住みついていたことが、私部・森遺跡や高地性の弥生時代遺跡として知られている南山遺跡から窺えるのである。その後、古墳時代に至っても、この肥沃な大地にその文化を残した遺跡がある。すなわち、近年発掘調査された私市にあった車塚古墳群をはじめ、交野丘陵の中腹にある寺村古墳群、倉治古墳群などがそれである。

環境にみる問題点

神宮寺遺跡から始まる交野市域の原始の文化が、神宮寺遺跡から星田旭遺跡へ、さらに南山遺跡や私部、森遺跡へと、この肥沃な土地へ住みついた人々の足跡がある。しかし、これらの遺跡が直接的に結びついていくかは、縄文時代早期の神宮寺遺跡と縄文時代中期の星田旭遺跡とを結びつける縄文時代前期の遺跡とその特色が両遺跡に関連しなければならないであろう。また、弥生時代の中期の南山遺跡と私部・森遺跡との結びつきを考える際も同様である。たゞ、神宮寺遺跡を交野市域の文化のあけぼのとして、以後縄文時代中期、弥生時代中期、後期に人々の生活した歴史の痕跡があったことを知りえるのである。このような状況は、交野市域にみられる特色ではなく、隣接する他市においてもみられる。すなわち、枚方、寝屋川そして四条畷市、さらに大東市などを含めた旧北河内群にみられる特色かと思われる。たとえば、古墳時代の遺跡からもその特色が顕著にみられ、埜野車塚古墳、忍ケ岡古墳などの北河内における前期に属す巨大古墳が築造されて以後、後期古墳の出現をみないか、あるいは時期的に新しい古墳をみるのみである。このような地域的な特色を北河内においてみることができるが、現段段では未踏査の遺跡があるのかもしれない。

第3章　神宮寺遺跡調査と研究経緯

神宮寺遺跡の発見から

神宮寺遺跡は、昭和32年にこの地で縄文土器片が発見されて以後、地元の郷土史研究の志によって昭和32年8月に最初の調査が行なわれ、次いで昭和33年、昭和34年に再三調査が実施されるに至った。調査によって得られた縄文土器には、当時貝・木・竹などの施文具によって船形の沈線文を等間隔に散列されたと考えられていた文様がみられた。そして、他に山形押型文、斜格子目文などの文様を施文した縄文土器片が発見された。さらに、神宮寺遺跡の器形が乳房状尖底土器であったとみられる尖底片も若干採収された。

また、昭和32年の発掘において炉址と思われる遺構が発見されたことが『交野町史』の「遺跡と遺物」の章で記されている。すなわち、「地表面より約四〇糎のところから二個の石が現われはじめ、四五糎になってこの石の東側に直径約六〇糎の木炭片・灰の集った炉址1があらわれた。さらにこの西側から小石をならべた炉址2もあらわれた」とみられ、当時の状況が窺えるが、縄文土器を検出したという状態も、また縄文土器を単独に検出せしめる包含層の存否も不明である。また、地表面下40cmの地点での出土に対する状況把握は、今回の調査で第1トレンチの中央部で表土下第2層を穿ってつくられた木炭灰および礫石を含むピット（深さ30cm前後）の出土状態と近似するように考えるが、炉址出土状況を実検していないので、断定をすることをさけねばならないであろう。

この町史刊行に伴って、同誌において昭和32年以来の神宮寺遺跡調査の集績をもって桜井敬夫氏によって『神宮寺早期縄文遺跡』が紹介された。しかし、これより以

前に片山長三氏によって「福宮寺早期縄文式遺跡の発掘」の第1回の報告がなされていた（『石鏃』所収、昭和32年、第9号）。

これらの調査にかかる報告を契機として、神宮寺遺跡の縄文土器文様への関心がたかまってきたのであった。

神宮寺式土器施文の研究

神宮寺遺跡を最初発掘した片山長三氏は、神宮寺式土器の施文は木・竹などで押捺して施されたもの（連続刺突文系施文）であると考えた。また、所謂隋円文・沈文の施文には、貝殻の背を押捺して施されたもの（貝殻条痕文系施文）と推察した（「神宮寺早期縄文式遺跡の発掘」・『石鏃』第9号所収）。これに対して、岡田茂弘氏は、神宮寺式土器の施文における特殊菱形押型文・平行線状押型文・連続刺突文・山形文・格子文、隋円文などの比率を統計的に処理された。同氏にみる連続刺突文・特殊菱形押型文そしてネガティブな隋円文などを含めた施文には若干の課題が含まれつつ、施文研究における片岡肇氏の神宮寺式土器の再検討まで待たねばならなかった。片岡氏は、この再検討によって、回転押型施文技法をもったものとして神宮寺式土器施文の問題解決を提示して、時期的にも神宮寺→大川式という位置づけを論考された。この神宮寺式土器の詳細な観察と実験をベースとした片岡論文のなげかけた再考論は賛非両論をもつが、大きな役割をあたえたといえる。しかし、施文にみる回転・半回転の技法における、とくに半回転技法にみる押型文への課題は残っていると考えられた。

しかし、神宮寺式土器の施文研究においては、同論文はたかく評価できるとともに、唯一の神宮寺式土器研究論考であり、半回転技法の詳細な観察と実測をベースとした研究が展開されることが今後の課題であろう。

（参考文献）

① 山内清男編『日本原始美術一、縄文式土器』講談社 1964年刊

② 片山長三編『交野町市改訂増補一』1971年刊

③ 片山長三編『交野町市改訂増補二』1971年刊

④ 八幡一郎編『世界考古学大系第一巻　日本Ⅰ　先縄文・縄文時代』平凡社　1959年刊

⑤ 鎌木義昌編『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』河出書房 1966年刊、とくに「Ⅱ、縄文文化の発展と地域性、7 近畿」（岡田茂弘）

⑥ 片岡肇「神宮寺式土器の再検討」（『考古学ジャーナル』第72号所収、1972年）

⑦ 坪井清足「縄文文化論」（『岩波講座・日本歴史』第1巻所収　1963年刊』

第4章　調査の目的と方針

調　査　目　的　　神宮寺遺跡は、神宮寺式土器のもつ施文方法や遺構の存否の問題から学術的にも重要な遺跡として知られてきた。そして、近畿にみる縄文時代早期の遺跡としても貴重な存在であった。しかし、これらの問題をもちながらも、その遺跡の範囲についてはほとんど明らかにされていなかった。昭和32年以来、地元の郷土史研究者の間で行なわれた調査によって、いくつかの課題を神宮寺遺跡およびその出土にかかる神宮寺式土器についての研究がなされながらも、確たる遺跡の範囲を確認すべき調査は行なわれなかった。

神宮寺遺跡の範囲確認が行なわれることによって、さきの課題を考えるべき学術的調査を実施することも、さらに遺跡そのものの保存への処置も具体的に行なうことも可能になるであろうと思われる。かつ、近畿において唯一の縄文時代早期の遺跡として、交野市域も例外なく宅地開発の渦中にある現状から保護することも可能になると考えられた。

このような意図のもとで、神宮寺遺跡の範囲確認を行なう必要性があり、範囲確認発掘調査を実施するに至ったのであった。したがって、調査にあたっては、範囲確認を目的として、調査によってもたらされる遺構の、また遺物の追求を第2次的なものとすることにした。したがって、発掘調査は広範囲にわたって地区設定を行なうことを主標として計画をたてた。しかしながら、土地所有者との交渉が進展しなかったところがあり、当初の計画よりもやゝ範囲を縮少しなければならなかったが、調査目的の遺跡の範囲確認を遂行するには充分と考えられた。

第5章　遺　　物

出土した遺物は、第1トレンチと第3トレンチでの若干の縄文土器の破片と石鏃、第4トレンチおよび第4′トレンチでの多数の縄文土器の破片と石片、さらに第4トレンチから第10トレンチの茶褐色砂質土（第2層）中と一部の茶褐色粘質土（第3層）中より検出した中近世の土器片である。

縄文土器

とくに、出土した縄文土器の破片はほとんどが細些なものであり、第3トレンチから出土した山形文が口縁部近くに施された縄文土器片を最大とする（図版八の6）。石器は一般に魚形石鏃として神宮寺遺跡特有の形を呈するので知られる石鏃1点（Fig1）で、他は石片である。また、出土した縄文土器片のうち、乳房状底部片が1点口縁部片がさきの山形文の土器を含めて3点で、他は器形のいずれの部分か明らかでない（図版四，八）。

中近世土器

一方、中近世土器片であるが、瓦器片、灯明皿片、瓦質の香炉の脚、陶器片などがある。これらの中近世土器片もほとんど復原可能なものはない（図版五）。

たゞ、今回の調査によって、縄文土器片のうち2・3点のものに施文の在り方を顕著に示すものがある。まず、さきに触れた山形文が施された口縁部片であり、この口縁部から縄文土器の器径が復原できる。この山形文を施文した縄文土器の口径は23cmをはかることができる。さらに、この山形文の施文法が回転押捺によって施されたことが窺えるとともに、この施文に使用した原体の直径およびその全長を推定することが可能である。すなわち、原体の直径は 0.4cm程度で、その全長は2cm内外の小さなものであり、2本の指で回転押捺したと考えられる（図版八の6）。

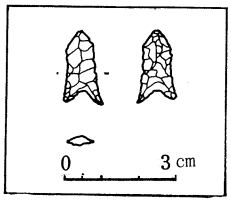


Fig1　石鏃実測図

また、このような原体で施文したことがあきらかにわかる縄文土器片、すなわち図版八の5と7にみられる沈文の文様がそれである。

これらの縄文土器片以外は、施文方法を知る手掛りになるものはほとんどなく、平行文、波状文、格子文、隋円文などがあり、先年調査がなされた際に出土した文様と同様である。

（註）　神宮寺式土器の施文方法についての詳細な観察と実験による研究として片岡肇氏の「神宮寺式土器の再検討」に詳しい。

たゞ、原体における半回転による押形文の施文方法の論理的な考察が若干曖昧さをもっているように思えるが、回転押形文施文には詳細な観察と論理がはらわれている。

一方、この章をまとめるにあたって、渡辺誠、四手井晴子の両氏をはじめ、さきの神宮寺式土器の施文の詳細な研究を行なわれた片岡肇氏の助言を得た。さらに、下記の文献を参照した。

① 岡田茂弘「II、縄文文化の発展と地域性、7近畿」（『日本の考古学II、縄文時代』河出書房刊）

② 片岡前掲書

③ 片山長三編『交野町史 改訂増補 一』、とくに「第三章、縄文時代」を参照した。

第6章　範囲確認調査の成果

調査の成果

神宮寺遺跡の範囲確認の発掘調査を実施し、遺跡にある耕地のA・B・Cの三地区内に12のトレンチを設けて調査した結果、A地区の第1トレンチの北側から第3トレンチの全域に亘って、縄文土器が単一に出土する包含層を確認することができる。

また、B地区内に設定した第4トレンチから第10トレンチに至る調査によって、第4トレンチの北側を除く全域と第4′トレンチの全域に亘って、縄文土器が単一に出土する包含層を確認することができた。

たゞ、C地区内に設定した第11トレンチと第12トレンチは、奈良時代創建にかかる開元寺跡の遺構として神宮寺遺跡の範囲とは異にするものとしておく必要があり、C地区は考慮しない。

したがって、単独で縄文土器が出土する第1トレンチの北側と第3トレンチの東西長さ10mの全域と、地形上において、このA地区の上段に位置する第4トレンチの南北長さ16mの内、北方4mまでの南11m内外の全域と、第4′トレンチ東西長さ10mの全域におよぶ範囲が、神宮寺遺跡の範囲であることがわかる。

調査成果による問題点

ここで問題にしなければならないのは、A地区とB地区の高低差を考えるなら、A・B地区を一つの遺跡の範囲として把握することが不可能になるのではないかと考えられることである。また、A地区、B地区を別々の範囲のものと把握するなら、縄文時代早期の一時期に二つの生活の場が存在していたことになる。さらに、時期的な差――層位的に神宮寺式土器が編年されていない、また単一層から各種施文の縄文土器が出土することから不可能である――があるなら、A地区からB地区へ、ある

いはB地区からA地区へ生活の場を移行したことが推定されるであろう。

しかし、縄文時代の集落史の諸研究の成果から導き出すなら、縄文時代の集落＝生活の場の広さは10m～15m四方の範囲と考えられ、神宮寺遺跡の今回の調査で確認されたA地区の東西10m内外（但し南北は農道によって分断されて明確ではない。）の範囲や、B地区の東西10m前後、南北11m内外の四方の縄文土器が単独に出土する包含層の範囲は、それぞれ集落＝生活の場としての広さにほゞ近似する範囲である。したがって、さきに推定したA地区とB地区とを個別の生活の場と考えることも可能であるが、A地区とB地区の高低差が現地形のまま縄文時代に存在していたものか問題である。

しかしながら、今回の調査によって、A地区とB地区に亘って神宮寺遺跡が存在し、この両地区に遺構があったであろうことが推定される。今回の調査では、縄文土器を包含する黒色の有機質土層を確認し、その層を追求することができた反面、調査前の土地所有者との協議による現耕作物への障害をもたらさない調査方法を前提としていたため、遺構を検出し、確認することはできなかった一面をこの調査はもっていた。

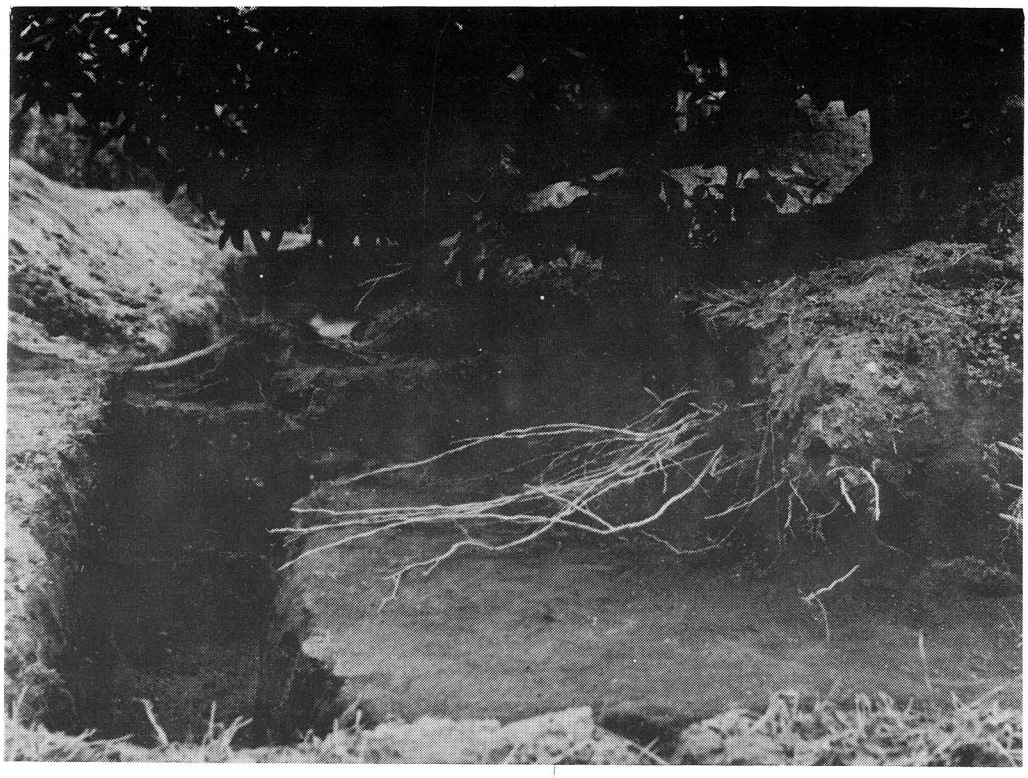
しかしながら、縄文土器自体、すなわち神宮寺式土器そのものを研究する上で、新しい事実を提供すべき資料としての縄文土器の出土をもたらしたといえよう（図版八の5と6）。この点については、次章において触れることにする。

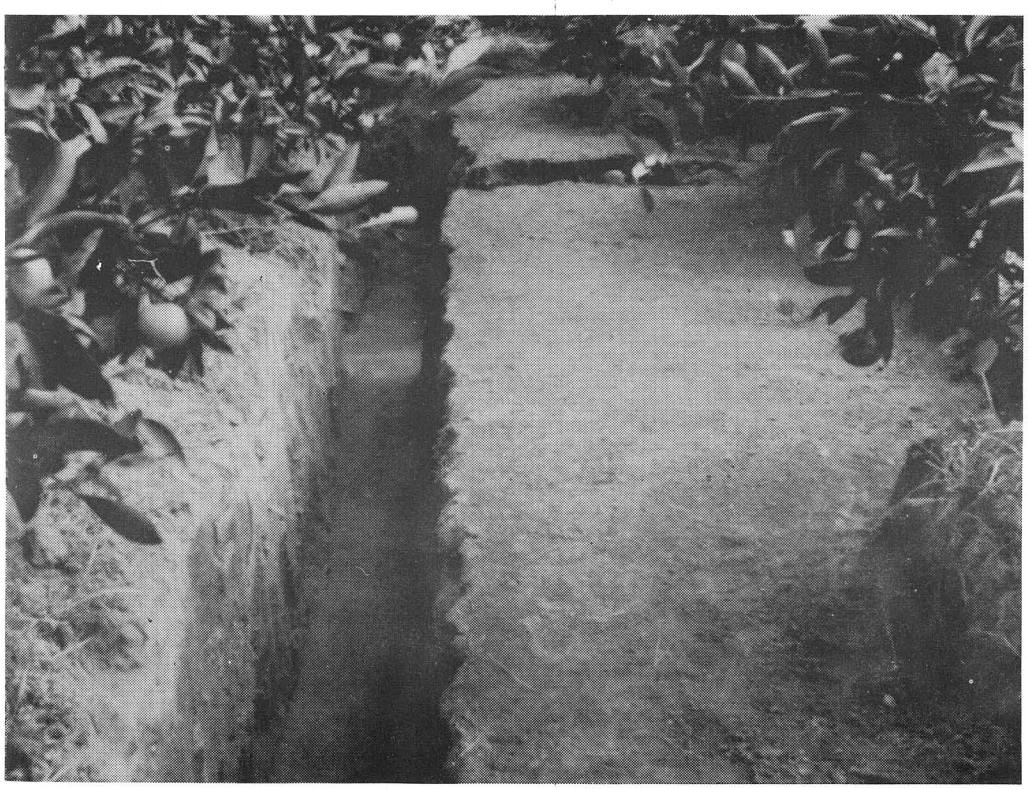
以上が、今回の調査で得られた新しい成果である。

図　　版

図版一　遺跡遠景

図版二　調査地区全景



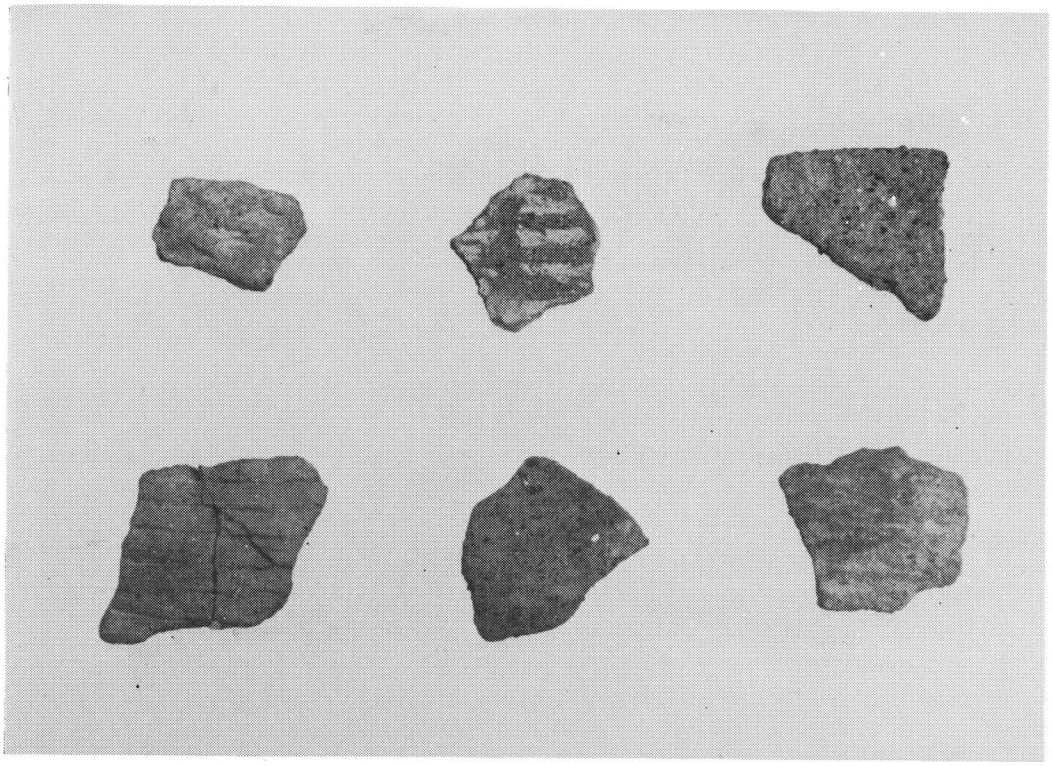


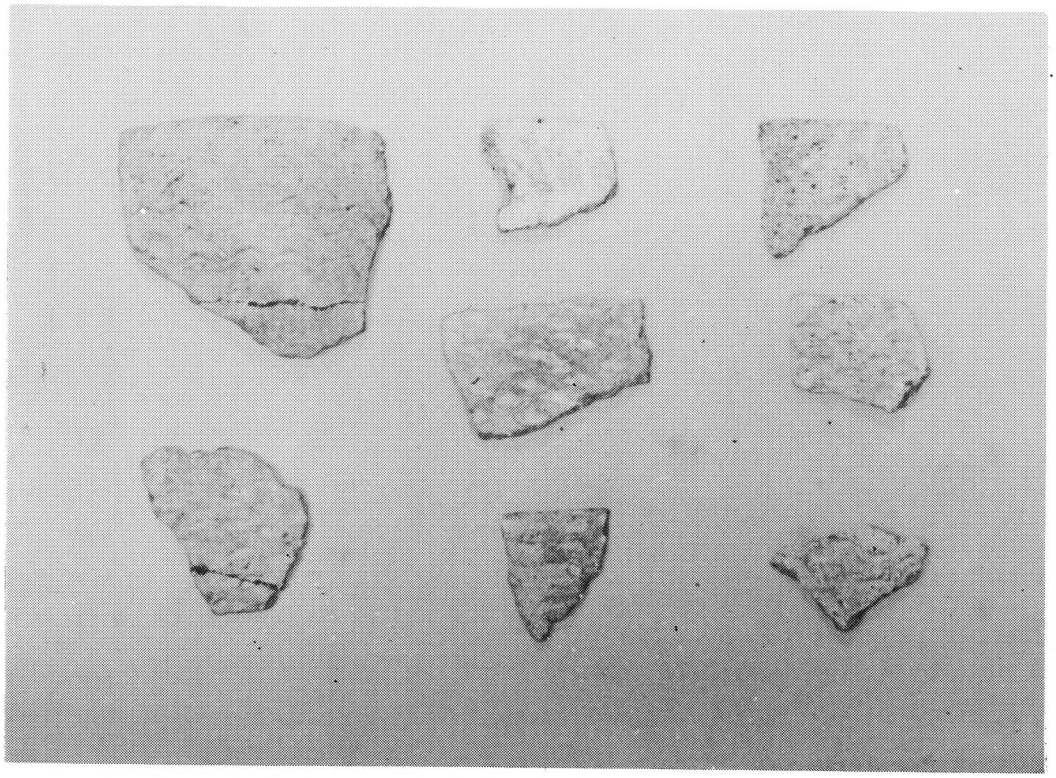
（上）第1トレンチ・（下）第7トレンチ

図版三　調査地区全景

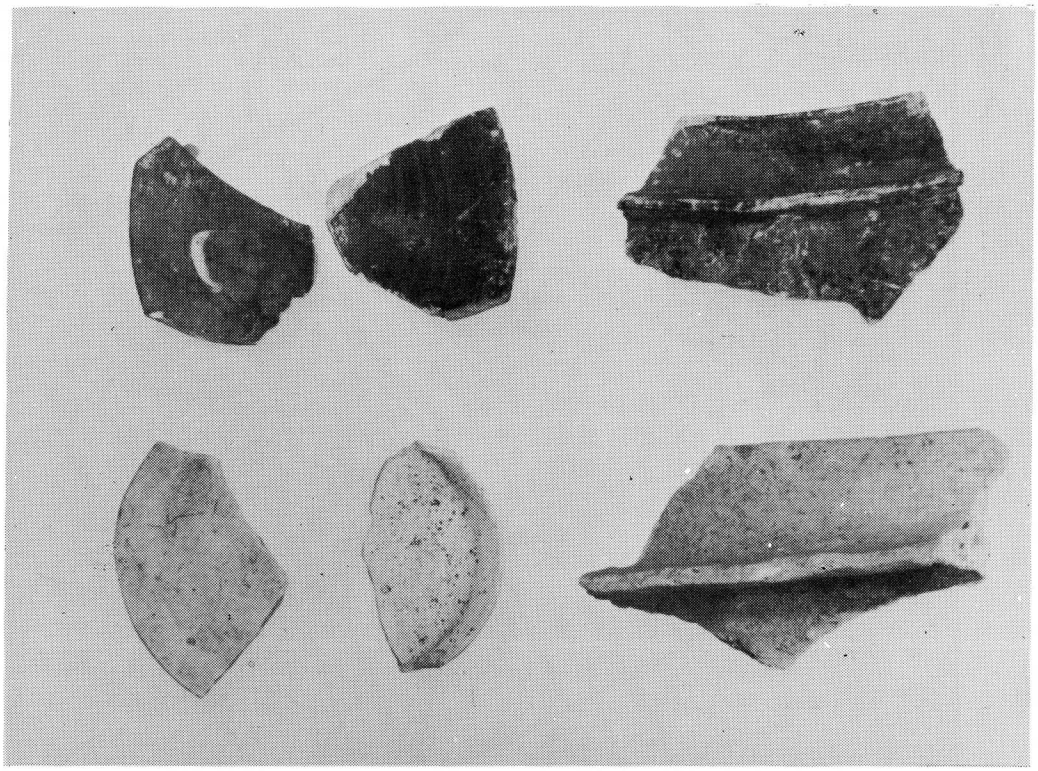
（上）第4トレンチ・（下）第4トレンチ

図版四　縄文土器

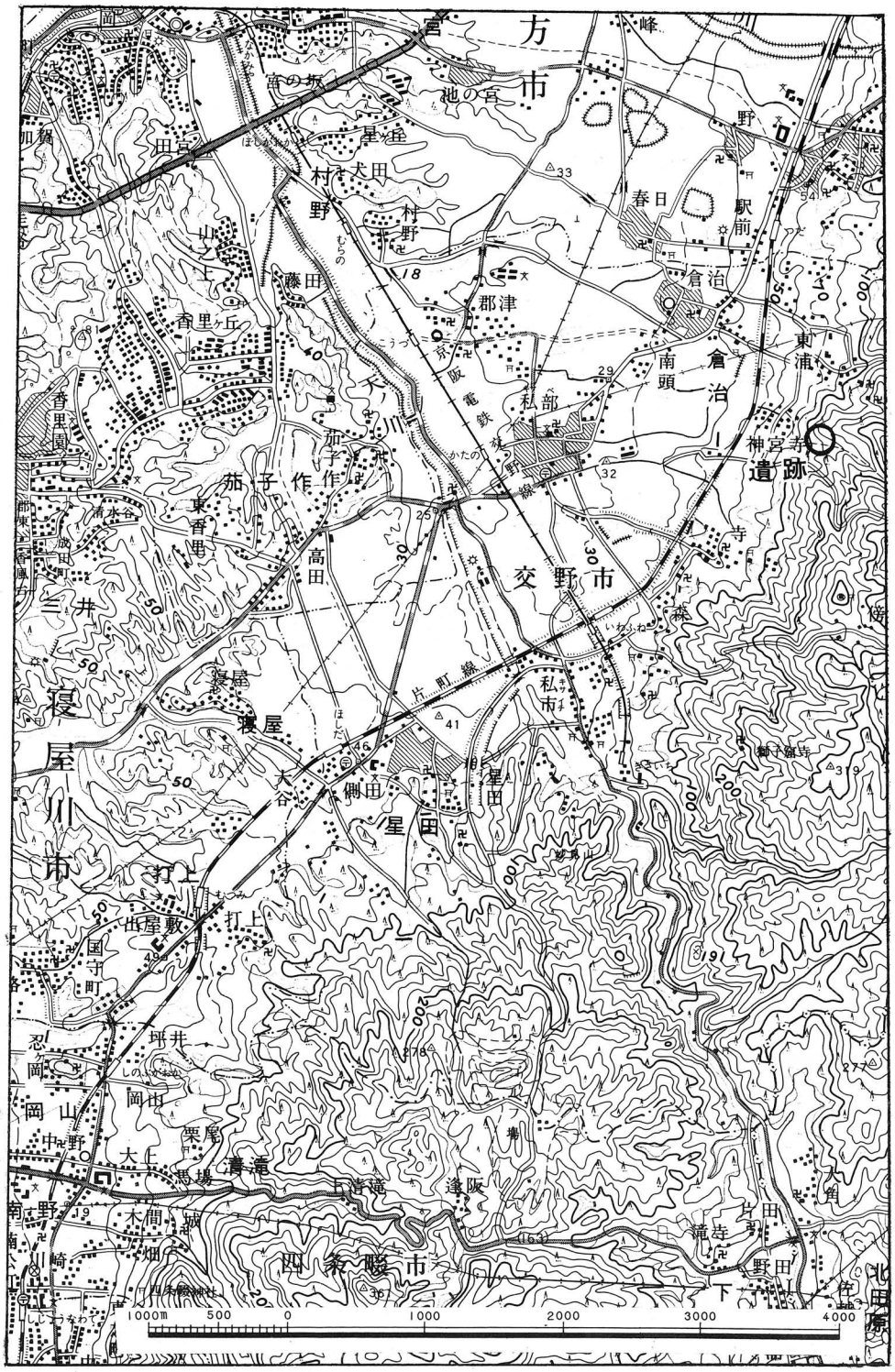




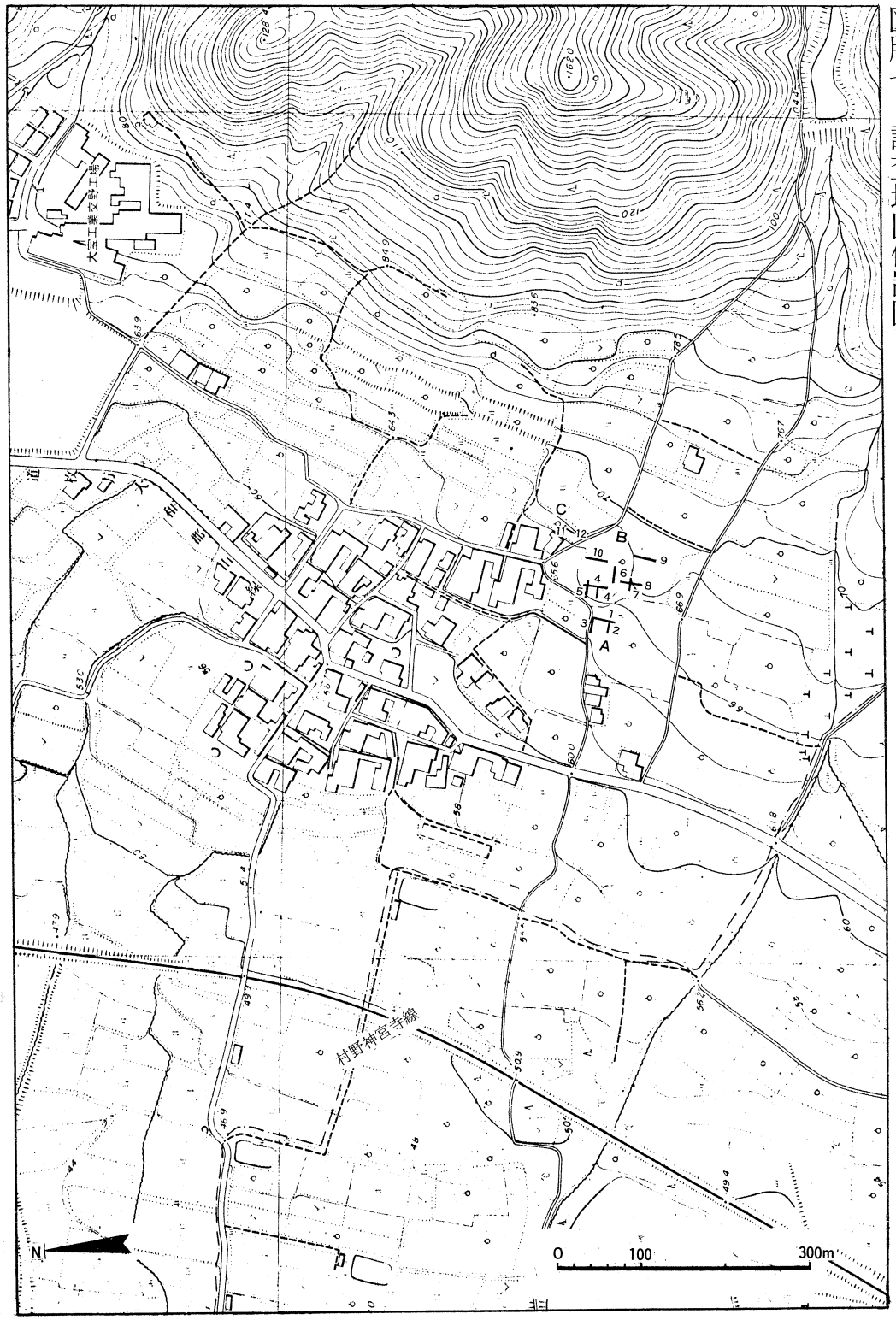
図版五　中近世土器



図版六　遺跡位置図

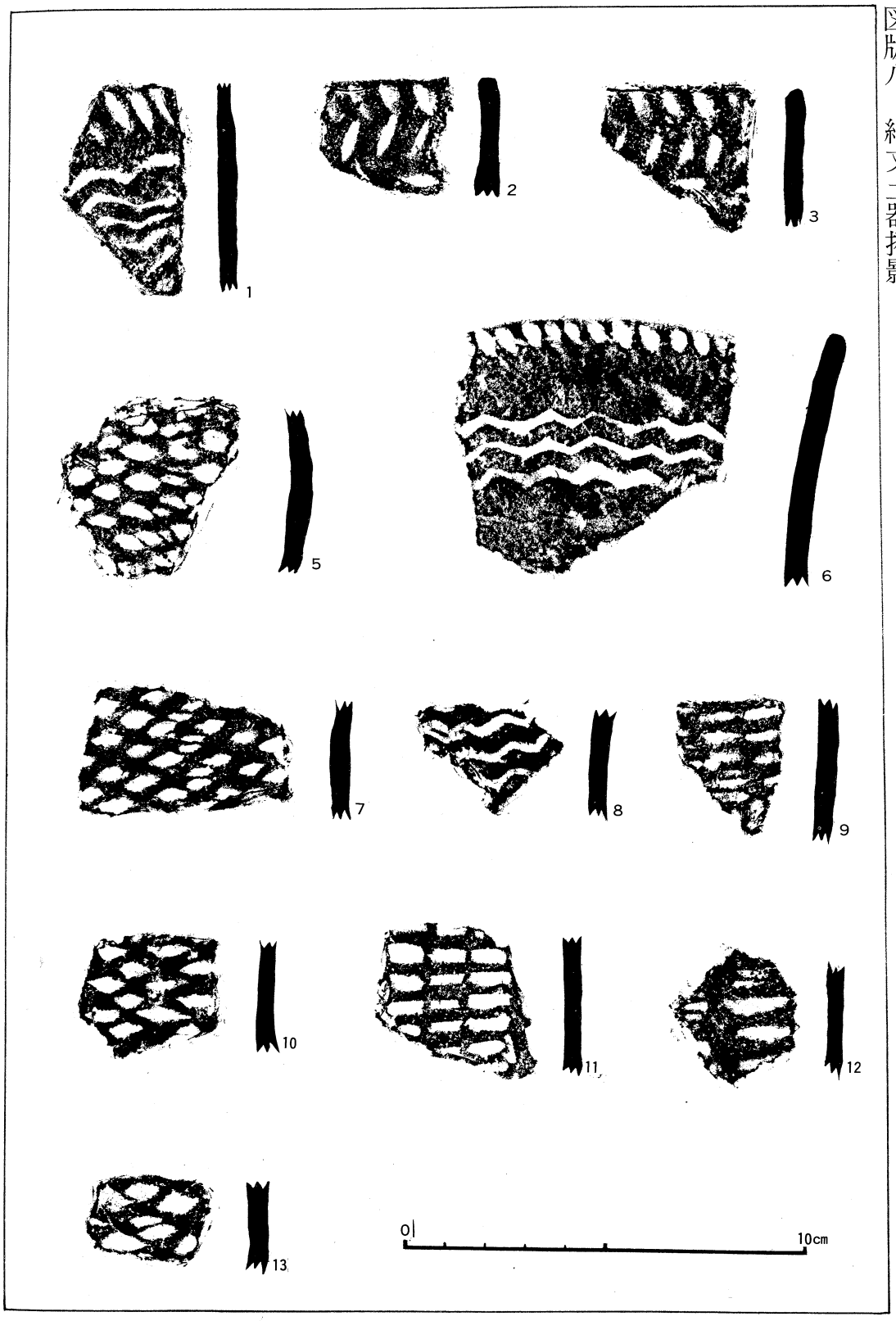

宮方市
池の宮
星田
犬田
村野
春日
駅前
倉治
郡津
藤田
香里ヶ丘
東浦
南頭
私部
神宮寺
遺跡
寺
交野市
高田
東香里
三井
寝屋川市
寝屋
大谷
側田
星田
打上
出屋敷
国守町
坪井
岡山
岡出
中野
大上
栗尾
馬場
清滝
逢阪
木間城
畑
四条畷市
滝寺
北田原
1000m 500 0 1000 2000 3000 4000

図版七　調査地区位置図

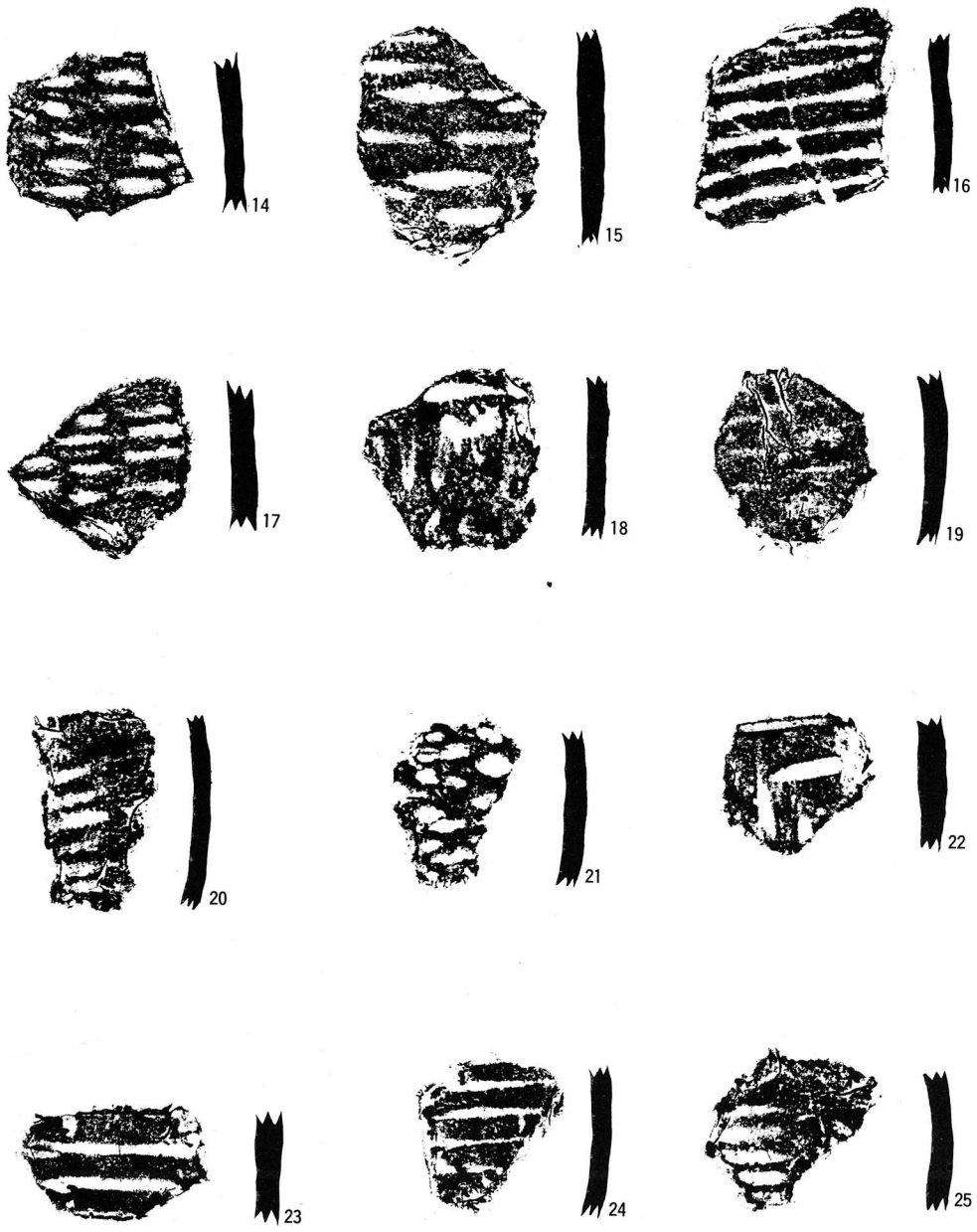


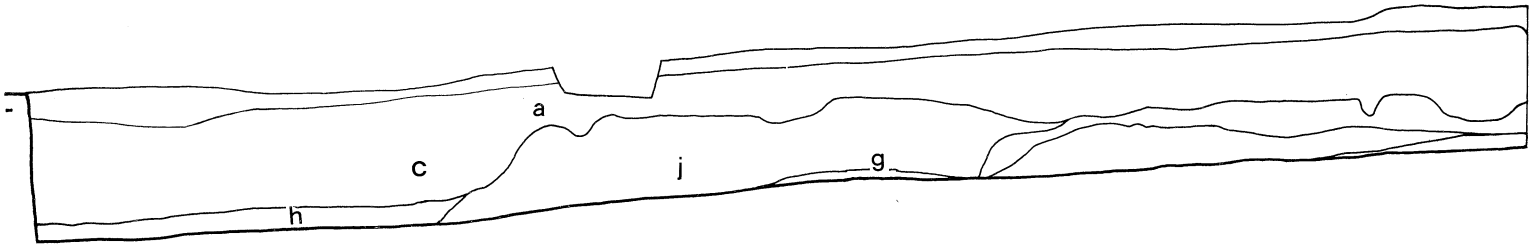
A・B・Cは地区　1～12はトレンチを示す

図版八　縄文土器拓影



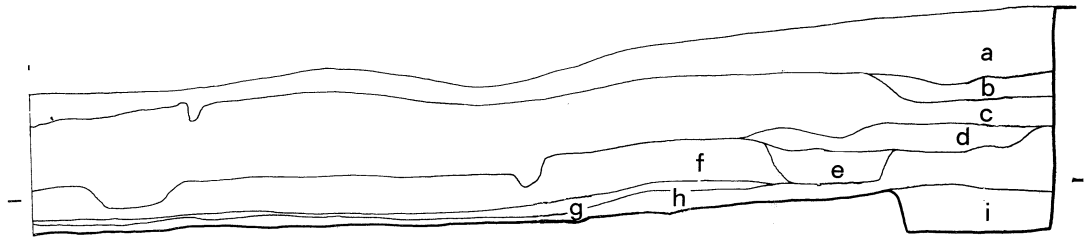
図版九　縄文土器拓影





a 表　　土　　層
b 黒　色　土　層
c 淡茶褐色粘質土層
d 茶褐色粘質土層

a 表　　土　　層
b 黒　色　土　層
c 淡茶褐色粘質土層
d 茶褐色粘質土層
e 黄褐色粘質土層
f 暗黒色有機質土層
(遺物包含層)
g 暗灰色砂質土層
h 淡褐色砂質土層
i 淡　灰　色　砂層
j 砂　　礫　　層



図版十　第四トレンチ断面図